

◆金澤健 選

毎月第三火曜日の夜九時から、松山で開催している松山滑稽句会での句をご紹介します。「穴」を題として作句したものと、雑詠をそれぞれ二句。この句会では、時に無季の句も提出される。

大穴を当てて落ちたる下水道 久我正明

良くわかる句です。しかし、溝ならともかく、下水道に落ちるのは至難の業なのでは？

瓶の穴虻の羽音のS O S 井口夏子

実際に、瓶にはまった虻が出ようともがいている様をそのまま句にしました。作者にとっては滑稽でも、虻は死に物狂いだったのでは？実は、作者が意図的に虻を瓶に入れたのではないかという意見もありました。

ひそひそと竹皮を脱ぐ茶屋の裏 久我正明

エロスを詠んでいるということで、高得点を獲得しました。エロスも又、滑稽に通ずとの皆の見解でしょうか。句会参加者の平均年齢の高さを窺わせませす。

野薊のひっそり咲いて寄れば刺す 井口夏子

女性を野薊に見立てれば、滑稽句として十分におかしみが味わえるとの評価です。確かに、このようなタイプの女性はおられます。決して作者がそうであるという訳ではありません。念の為。

◆三橋百笑 選 ～朝日新聞の俳壇より～

昼寝でもしたらと医者処方かな 佐藤博

この処方、日本一の名医ですね！患者さんの八十パーセントはこの処方があてはまる！かも知れません。薬の出し過ぎ医者がごまんというこの時世、あー、こんな名医さんにお会いしたい。

つくしんぼ夜は屈伸運動す 大年 厨

なんと、金子兜太選ですよ。百才になれんとする脳みその軟らかいこと！実は夜、先生も屈伸運動をしておられるのかな。

吊革に春眠のぶら下りをり 奥村英忠

私もOL時代、まさにこんな状態の車中ありました。ああ一懐かしいなー。

逃亡者自首したくなる寒さかな 谷口車香

読後、悲しく切なくなるばかり...でした。

笑はせてみたいと思ふ槍ヶ岳 二村吉光

まったく、年がら年中“槍”、でいては、さぞかし疲れて味気ない日々でしょう。たまには全身をくねくねさせて笑ってもらいたいものです。そんな紳士、結構おりますわ。同居しております。

眠いのは春が過ぎても同じなり 二宮正博

私など、いつも眠いので、どこか壊れているのか、ハズレているのか。

昼寝して床屋に顔を忘れけり 池田合志

アハハハ、実に楽しいですね！夫もよく、床屋に忘れて来ますので。

いぢめみる目高をすくひ論したし 三橋百笑

鯨のたまに霞を食べてをる 三橋百笑

寒紅をなほして挑む同窓会 三橋百笑

ラストの三句は、自作です。クスツとしてくださいませ。

滑稽句のおかしさは、読み手であるおのれ自身の心身が、健全な状態に整っていないと、すーと入ってこないものだと、つくづく思いました。

#### ◆日根野聖子 選

久松久子 句集「松の尾」「続 松の尾」

山の蚊の宝物殿に迷ひ来ぬ

参道にバスづかづかと神の留守

めでたさも倍に双子の七五三  
節分会大蛇（おろち）解体して了る  
たつぷりと生き月の座に加はりぬ  
追儼面外せば面炮（にきび）面となり  
節分会大蛇蛇腹に畳まるる  
神域にあらば鶯神の声  
鳥の恋神の御前憚らず  
神の亀撫でられ過ぎて鳴くことも  
神域をせばめ山吹三千本  
七五三着飾つてゐて運動靴  
小春日が勿体なくて松尾まで

著者は、昭和八年、茨城県生まれ。昭和六十年、「馬酔木燕巢」に入会し、羽田岳水に師事。平成九年、「百鳥」に入会、大串章に師事し後に同人となる。平成二十一年より滑稽俳句協会会員。「松の尾」とは、京都の松尾大社のことだが、七つの星を背負った大亀の伝説や、日本最古の男神女神像を持つなどその起源は古く、この社で「授かった」句のみを収録。